

# 中国語の場所詞について

—モノ・トコロという観点から—

丸 尾 誠

キーワード：場所詞、方位詞、モノとトコロ

## 0. はじめに

中国語のいわゆる場所詞に該当する“家、学校”などは意味的に「建物・場所・組織」などいくつかの側面を併せ持つ。本稿では、こうした場所詞の有する「モノ」と「トコロ」という概念の対立に着目し、それが中国語の統語構造に如何に反映されるのかということについて考察する。

## 1. 場所詞について

朱徳熙1982:42は「場所詞」と「名詞」を区別して立てたうえで、場所詞を統語的観点から、次のように定義している。

- (1) a. “在、到、往”の目的語となりうる
- b. “哪儿”で尋ねることができる
- c. “这儿、那儿”で代替できる

このような基準に照らして区分した場所詞・場所連語は、一般的に次のようにまとめることができる（以下、本文中で使用する「①～③」はこの区分を指すこととする）。

(2)

- ① 地名   : 日本、北京 ……
- ② 場所を表す意味を含んだ語             : 家、厨房、学校、教室、宿舍、公園、广场、商店、食堂、邮局、车站、图书馆、办公室、飞机场 ……
- ③ 位置を表す語
  - i) (合成)方位詞                         : 上面、前头、东边、里头 ……
  - ii) 指示代詞                               : 这儿、那里 …… (“你那儿”などを構成する)
  - iii) 空間義を表す名詞                   : 周围、附近、旁边 ……
  - iv) 名詞+方位詞                         : 桌子上、椅子上、黑板上、树林里、信封里 ……

そして、こうした分類の根拠ともなっている統語的振る舞いとしては、介詞“在”の目的語となった上記の語彙に関して

(2)'

- ① および③ i) ~iii) : “里、上” 不要 ……トコロ性を本来的に有する
- ② : “里、上” 省略可能 ……トコロ性を含む
- ③ iv) : “里、上” 必要 ……名詞のみではトコロ性を有さない

のような関係がこれまでも示されてきた。この中でも、特に②を用いたトコロ表現にみられる「方位詞の用法に関する問題」が主として統語構造・意味機能の面、および人間の認識との関連において扱われてきた。これらの語彙については、方位詞を用いた場合とそうでない場合で意味の差が往々にして不明瞭である。

(3) a. 他在图书馆看书。 [彼は図書館で本を読む]

b. 他在图书馆里看书。 [同上]

方位詞の用法についてみると、まず音節の面では“家”のような単独でも使用可能なものはあるものの、通常、単音節語では方位詞が必要となる。

(4) “街 [大通り]、路 [道]、床 [ベッド]” + “上” (③ ivのタイプ)

次に語彙の面からみると“屋子、房子、院子、村子”などについては、その語自身の表す意味からはトコロ性が感じられるものの、文法的には“里”が必要となっている。一方で同じ意味を表すものであっても、統語的振る舞いが異なる場合がある。例えば同じ「店」を表す語でも“商店”と異なり、“铺子”では“里”が必要である。

(5) 彼は店にいる

a. 他在商店。

b. \*他在铺子<sup>1)</sup>。 → 他在铺子里。

②の語彙である“广场、操场、公园”などは実際の空間をその機能によって区分したものである。例えば“家、学校、图书馆、邮局”などは内部空間(トコロ)を有する具体的な建物(モノ)を表しうる。そして“厨房、教室”などはそうした建物の内部空間において、その個々の機能に基づいて区分された独立した部分である。

(6) 学校 > 教室、办公室、实验室 ……

家 > 客厅、厨房、卧室 ……

通常、この②はモノ的に捉えられた名詞と、トコロ的に捉えられた場所詞の兼類となっているが、名詞の場合であっても、その組織・機構としての抽象的実体と、建造物としての具象的実体との両面を併せ持っていることもあり、方位詞による表示を伴わない単独の語としてみた場合には、モノとトコロについての明確な線引きはとりわけ困難となっている。

こうした場所詞が目的語となった場所目的語(“处所宾语”)の代表的な定義としては、次のようなものが挙げられる。

(7) a. 表示动作行为涉及的处所 《李临定 1990 : 151》

b. 语义：动作或行为及于某处所或在某处发生。《孟琮等 1987：8》

また朱徳熙 1982：113－114 は場所目的語をその意味の違いに基づいて、次のように「広義のもの」（“广义的”）と「狭義のもの」（“狭义的”）に二分している（日本語訳・体裁は引用者）。

(8) a. 広義の場所目的語…場所詞および場所連語から成る目的語のすべてを指す。

例：我惦记着家里 [私は家のことを気にかけている]

・“家里”は“我”の存在する位置を表していない。これは“我惦记着孩子”と同じタイプの構造である。

b. 狭義の場所目的語…方向あるいは位置を表す動詞性成分の後に伴われる場所詞および場所連語から成る目的語を専ら指す。

例：我坐在家里 [私は家にじっとしている]

・“家里”は“我”の存在する位置を表している。

つまり、「広義の場所目的語」においては場所を表す語が対象として捉えられており、李臨定 1990：157 は同様の主旨のものを“対象性质的处所宾语”と称している。このような目的語をとる動詞としては“愛、喜欢、怀念、讨厌”など心理を表す動詞が挙げられる。一方、「狭義の場所目的語」をとる動詞には限りがあるとしたうえで、朱徳熙 1982：114 は

(9) a. 方向動詞 “来、去、进、上 [上がる] ……”

b. 運動を表す動詞 “上 [行く]、飞”<sup>2)</sup>

c. 位置を表す動詞 “在、到” (“V在、V到”も含む)

の3種類を挙げている。すなわち厳密な意味でのトコロというのは「移動」や「存在」の意味で用いられた場合であり、両者は「方向性」の有無という点で対立する。

(10) 場所目的語： 広義のもの —— 狭義のもの

【モノ】

【トコロ】

対象

移動 [+方向性] — 存在 [-方向性]

また、場所目的語の意味役割として

(11) a. 起点 例：离开北京

b. 通過点 例：过桥

c. 着点 例：去北京

d. 動作が行われる場所（“原点”） 例：睡沙发

のような区別がしばしば示されるが（孟庆海 1986 ほか参照）、このうち a～c が「移動」に、d が「存在」に関連する概念である。

## 2. モノとトコロ

「テーブル」自体はモノであるが、トコロとして用いることも可能である。

(12) a. 部屋にテーブルを置く。 【モノ】

b. 本をテーブルに置く。 【トコロ】

池上2000では「モノ」と「トコロ」が直接に関係するのは、「空間的存在」という様相において「一つまり、あるモノがあるトコロ」に存在するという形での関係において（187－188頁）であることが述べられている。そしてそこでは「有界的な対象」をモノとし、「無界的な対象」をトコロとする非対称性から「海上ノ船」に対する「？船下ノ海」の不自然さを解釈している。同様に「机ノ上ノ本」に対して「？本ノ下ノ机」が有標（marked）となるのは、机の表面部の拡がり相対的に無界的なものとして捉えられるためである（池上2000：188参照）。つまりここでは机が認知言語学でいうところの「地」（ground）となっている。一般的に動態表現においては、動くものが相対的に重要なものである「図」（figure）になりやすいものの、例（12b）のような「モノ＋モノ」の静態的な存在表現においては、知覚的により際立つものが、「図」として認識される。以下、「モノ」と「トコロ」という概念の対立が中国語ではどのように言語化されるのかについて考える。

### 2.1. モノ・トコロとしての側面

次の日本語と中国語の対照例をみると

(13) 日： 彼はタバコに火をつけた。

中： 他在香烟上点了火。

《平井・成戸1993：169》

日本語ではタバコが対象（モノ）として示されているのに対し、中国語では場所（トコロ）表現を用いて表現される。同一の事象をモノ・トコロのいずれとして捉え、それを言語化するかということについては、これまでも対照研究のテーマとしてしばしば取り上げられてきた<sup>3)</sup>。例えば

(14) 英： go to the station

日： 駅に行く

中： 去火车站

本来ならモノとして扱われることが可能な「駅」が、方向表現の中に組み込まれるとトコロとして捉えられることになるが、その捉え方の切り替えについては、各言語によって差がみられる。英語では前置詞 to の後にそのまま名詞をおくことができるのに対し、日本語・中国語では名詞をトコロ化させる必要がある。

(15) 英： go to the desk

日： \*机に行く → 机のところに行く

中： \*去桌子 → 去桌子那儿

また物理的に空間を有する「部屋」を表す語を用いた存在表現についても、中国語では通常、トコロ化した表現が用いられる。

(16) 英： He is in the room.

日： 彼は部屋（の中）にいる。

中： ?他在房间。 → 他在房间里。

\*他在屋子。 → 他在屋子里。

池上 2000 は「言語として表現される場合、〈モノ〉と〈トコロ〉に異なった扱いがなされるということは、両者が基本的に対立する概念化に基くものとして捉えられるということであろう」（211－212頁）としている。そしてこのことについては1つの言語内においても対立がみられる。例えば、中国語では複合方向補語を用いた場合の目的語の位置について、モノとトコロでは統語的に異なった振る舞いをする。

(17) 带回一架照相机来 — 带回来一架照相机

【モノ】 [カメラを1台持って戻ってきた]

跑回宿舍来 — \*跑回来宿舍

【トコロ】 [寮に走って戻ってくる]

トコロの場合、目的語の位置は“来／去”の前に限定される。

名詞と場所詞の用法を区分したうえで、両者の関係について史有为1982:6-7は「“中国、长江”など一般に場所詞とみなされるものであっても具体的な構成物を含む実体として出現したときには名詞であり（例：拉萨非常美丽）、一方、一般の名詞であっても人間の活動空間座標の一点として捉えられると場所詞となる（例：他在图书馆看书）」という旨、記述している。つまり例（2）で区分した②の語彙はそれ自体で本来的に具体的な建物という形で目に見える実体を持つものとして捉えられる一方で、人間の存在・活動の場所として抽象化されうる。そうした意味でも、モノ・トコロの両側面を備えているといえる。

中国語の“有”には「存在」と「所有」の両側面がある。日本語で同様の意味を表す動詞「いる／ある」が主として主語の「有生／無生」によって区別されうるように、中国語でも主語が意志的な場合には所有を表すことになるが、統語的にみると、両者の違いは“有”の前にくるものが名詞であるか場所詞（あるいは場所連語）であるかということでもある。

(18) a. 我没有资料。 【所有】 [私は資料を持っていない]

b. 我这里没有资料。 【存在】 [私のところには資料がない]

そして、このことは②の語を用いた場合にも当てはまる。

(19) a. 图书馆有很多书。 【所有】 [図書館はたくさん本を有している]

- b. 图书馆里有很多书。【存在】[図書館にはたくさんの本がある]

《荒川 1984 : 6 - 7》

次の例からも分かるように、「図書館」はモノ・トコロの両側面を備えている。

- (20) a. 这是图书馆。 【モノ】 [これは図書館だ]

- b. 这儿是图书馆。 【トコロ】 [ここは図書館だ]

従って、(19)において物理的次元で表されているのはいずれも存在の状況であるものの、方位詞が用いられ純粋に実際の存在を表している(19b)に対して、(19a)は広い意味での所有者となっている。これはその組織という性格に着目することによる。この認識により、(19a)ではいわば図書館というものの一般的な属性(すなわち「図書館というものは、たくさんの本を有しているものだ」ということ)について述べたものだともいえるが、このような解釈が必ずしも当てはまらない“学校”や“公園”のような場合には、文法的な指示化あるいはトコロ化により、個別の事例として特定化(具象化)する必要がある。

- (21) ?学校有很多学生。

→ a. 那个学校有很多学生。 【所有】 [あの学校にはたくさんの学生がいる]

→ b. 学校里有很多学生。 【存在】 [学校にたくさんの学生がいる]

- (22) ?公园有很多人。

→ a. 那个公园有很多人。 【所有】 [あの公園にはたくさんの人がいる]

→ b. 公园里有很多人。 【存在】 [公園にたくさんの人がいる]

## 2.2. モノのトコロ化

中国語の動目連語における動詞(V)と目的語(O)の多様な意味関係については先行研究でも多く取り上げられてきた。とりわけ孟琮等 1987 : 7 - 11 にみられる区分は、その不備を指摘されながらもこれまで多くの研究論文で引用され、考察の際の根拠とされてきた。その分類タイプの1つである「場所目的語」の有するモノとトコロという両側面に着目して、ここでは「モノのトコロ化」について考察する。

次の(非移動的な)動作表現における例では、行為の対象自体が場所でもあるため、“VL → V在L”(Lは「場所を表す語句」という変換が可能となる。

- (23) a. 擦盆里 → 擦在盆里 [鉢の中をこする] 《aは孟琮等 1987 : 60》

- b. 伤表面 → 伤在表面 [表面を傷つける]

そして対象であるモノのトコロ化については、対象との接触のあり方を述べた次のような場合にもいえる。

- (24) a. 打屁股 打在屁股上 [尻をたたく]

- b. 拍桌子 拍在桌子上 [机をたたく]

- c. 刷房顶 刷在房顶上 [屋根を塗る]  
 d. 弹脑袋 弹在脑袋上 [頭を（指先で）はじく]

《張黎 2001 : 86 - 87》

ここで述べられているのは接触という、対象への作用の到達であり、それが場所として認識できる要因となっている。VOおよび（対象がトコロ化された）“V在L”両形式ではほぼ同じ意味を表すことができるものの、後者においては結果補語という形式により、その行為が結果的にLに至ったということから、意味的には非意図的なものであったことを含意しうる。

また、次の例では同一の対象がそれぞれモノ、トコロとして表現されている。

- (25) a. 你擦擦脸 [顔を拭きなさい] → 你擦擦脸上  
 b. 他刷顶棚 [彼は天井を塗っている] → 他刷顶棚上

《孟庆海 1986 : 263》

こうした統語的なトコロ化に対し、次の孟琮等1987の例では意味的にその対象がそれぞれ“受事宾语”“处所宾语”と異なるものとして認識されている。

- (26) a. 洗衣服 【受事】 [服を洗う]  
 b. 洗后背 【处所】 [背中を洗う]

《孟琮等 1987 : 802》

- (27) a. 剃头发 【受事】 [髪を剃る]  
 b. 剃头 【处所】<sup>4)</sup> [頭を剃る]

《孟琮等 1987 : 727》

中国語では対象が身体部位名詞である場合には、特にそれをトコロとして捉える認識から“在+L+V”の形でも表現が可能となるが、このとき“在+L”を意図的な行為の場所として捉えることができる。

- (28) 肩をたたく  
 a. 拍肩膀  
 b. 在肩膀上拍一下  
 c. 拍在肩膀上  
 (29) 犬が彼の足を咬んだ。  
 a. 狗咬了他的腿。 《平井・成戸 1993 : 186》  
 b. 狗在他腿上咬了一口。 《平井・成戸 1993 : 174》  
 c. 狗咬在他腿上了。 《平井・成戸 1994 : 120》

“在LV”の形をとったbでは行為・場所ともに意図されたものであるが、“V在L”の形をとったcでは場所は非意図的なものである（例（28c）については「手がたまたま肩に当たってしまった」というニュアンスが強い）。

池上 2000 は身体に「モノとしての対他的な側面」と「トコロとしての対自的な側面」の二面性を認めたいうえで、「身体をくモノ」として捉えるか、あるいはくトコロ」として捉えるか、という認知的な選択は、言語化される際の表現形式の違いとして反映されてくる」(206頁)と述べている。身体部位に関してモノ・トコロのいずれとして把握するかが構文に反映される現象は英語にもみられる。

(30) a. She struck his head. 【モノ】

b. She struck him on the head. 【トコロ】

身体部位にみられるトコロ化は、「部分—全体」というメトニミー的關係に基づくものであり、これはある部分が焦点化されることによるものだと見える。上記例では体全体の中の一部分に言及することによって、トコロとしての概念化が成立している。そしてこのことは身体部位のみに見えるのではなく、例えば次の例にも当てはまる。

(31) ~最后还在钢轮条上踢了两脚, [最後にはさらに鋼のスポークをポンと蹴った]

《骆驼祥子10》(→ 还踢了两脚钢轮条)

ここでは行為の対象であるスポークは車輪の一部である。また次の例でも、場所を問いたずす疑問詞を用いて聞けることから、部分がトコロ化することはみてとれる。

(32) a. 你哪儿不舒服?[君はどこが具合悪いのですか]

b. 汉语什么地方最难?[中国語はどこが一番難しいですか]

### 3. 方位詞との関連

#### 3.1. トコロの具象化

例えば“\*躺床”は“床”がトコロを表しえないため成立せず、“躺床上”のようにしなければならない。同様のものに

(33) \*放桌子 → 放桌子上[机に置く]

\*掉地 → 掉地上 [地面に落ちる]

などがある。とりわけ北京方言の口語では、“坐椅子上”のような“坐{在/到/·de}椅子上”から“在/到/·de”が脱落したとされる形がみられる<sup>5)</sup>。

存在表現におけるトコロ化の手段としては「方位詞」の付加の他に、「指示詞」を用いることによっても実現する(方経民 2002b 参照)。

(34) \*屋子没有人。

→ a. 屋子里没有人。 【+方位詞】 [部屋の中には人はいない]

→ b. 这屋子没有人。 【+指示詞】 [この部屋には人はいない]

(35) \*词典放在书架。

→ a. 词典放在书架上。 【+方位詞】 [辞書は本棚に置いてある]

→ b. 词典放在那个书架。 【+指示詞】 [辞書はあの本棚に置いてある]



このような方位成分の使用によってその名詞は指示的 (referential) な解釈を受け、その結果、個別の具体的な情況について言及することとなり、文は成立する。方経民2003では中国語のハダカ (“光杆”) の名詞には“无指 (non-referential) / 有指 (referential)” の2通りの解釈が可能であるとしたうえで

- (36) a. 他住学校。 【无指/有指】 [彼は学校に住んでいる/泊まる]  
 b. 他住学校里。 【有指】 [彼は学校に泊まる]

の両者が異なることを指摘している。すなわち、(36a) が「(校外に位置する寮なども含めた) 学校の施設内で生活している」という日常的な行為 (“无指”) に加えて、「ある特定の学校に泊まる」という具体的な行為 (“有指”) をも表しうのに対し、方位詞を加えた (36b) には“有指”の解釈しかないというものである。こうしたいわゆる「抽象的行為」と「具体的行為」の区別については、次のような日常性が問題となっている対話において、“里”を用いて回答すると成立の度合いが下がることから、その存在をうかがい知ることができる。

- (37) “你住哪儿?” — “我住学校。/?我住学校里。”  
 [君どこに住んでるの] [私は学校 (の施設) に住んでいます]

次の例では“里”のないaでは抽象的な組織としての面が、一方“里”のあるbではそれに加えて実質的な存在が表されている。

- (38) a. 食堂的人 食堂で働いている人  
 b. 食堂里的人 { 食堂で働いている人  
                   { 食堂に来ているお客

《高橋 1989 : 92》

また、方位詞が省略可能な②類の“教室、厨房”などの上位概念に当たる“房间”という語はハダカの形で用いた場合、フリーコンテキストでの表現としては成立しにくい。

- (39) ?他在房间。《例 (16) 再録》

これを次のような手段を通して具現化することにより、文は成立するようになる。

- (39)' a. 他在房间里。 【方位詞の使用】 [彼は部屋にいる]  
 b. 他在自己的房间里(里)。 【特定化】 [彼は自分の部屋にいる]  
 c. 他在102房间里(里)。 【特定化】 [彼は102号室にいる]

“他在房间。”は、例えば“他在不在房间?”のような問いに対する回答としてなら問題なく成立するものの、その場合には“房间”は既知情報として扱われ、指示的となっている。同様の働きは (39a)' にみられる「方位詞の使用」という文法的手段によっても実現され、このときには発話時点で確認可能な具体的な存在が表されている (前述の“有指”に相当)。結局、“房间”のような総括的な空間概念とは異なり、“教室、学校、图书馆”などの②類の場所詞が“S(主体) + 在 + L。”の形で“里”を用いずに使えるのも、

実際の発話の場面においてはLが特定化されている事情にもよる。例(35)では方位詞を加えた“书架上”はいうまでもなく、“上”のない“那个书架”でも場所が具象化されているために成立した。従って(39)の“房间”についても、(39b)’、(39c)’の例のように語彙的に特定化されることにより、“里”なしでも成立するようになる。

### 3.2. モノ・トコロの機能に対する認識

方位詞の問題としては、その省略の可否についてのみならず、どの方位詞を用いるのかという面にも先行研究では関心が注がれてきた。例えば方位詞“里”と“上”の使用の互換性には差がみられる。

- (40) a. 湖里有一条很大的船。[湖に大きな船が1隻ある] → 湖上  
b. 湖里有一条很大的鱼。[湖に大きな魚が1匹いる] → \*湖上

《高桥 1992 : 54》

(40a)の“里”は“上”と置き換えが可能であるが、(40b)では不可能である。これは存在するモノとの位置関係によって、“湖里”の指し示す範囲が(40a)では「陸」との、(40b)では「空中」との対比において捉えられることによる。このように「名詞+方位詞」の指し示す位置・範囲は、存在するモノとの位置関係によって決まるといえる。次の方经民 1997 : 135 にみられる“外物参照”と“内部参照”という概念も、トコロとモノの結び付きに基づいたものであるといえるが、これには言語外事実に関する知識が関わっている。

- (41) a. 教室前边有棵树 [教室の前に大きな木が1本ある]  
      预设: 树只能出现在教室外边      【外物参照】  
b. 教室前边有讲台 [教室の前に教壇がある]  
      预设: 讲台只能出现在教室里边      【内部参照】

《方经民 1997 : 135》

中国語で常用される方位詞“里、上”には、基本的には「内部」対「表面」という意味的な対立がある。

- (42) a. 箱子里 [箱の中]  
      b. 箱子上 [箱の上]  
(43) a. 夹在书里 [本の間挟む]  
      b. 掉在书上 [本の上に落ちる]  
(44) a. 书在书橱里(\*书橱上)[本は本棚にある]  
      b. 书在书架上(\*书架里)[本は本棚にある] 《(44)は刘宁生 1994 : 174》  
(45) a. 坐在家里 [家にじっとしている]  
      b. 坐在椅子上 [椅子に座っている]

(46) a. \*坐在飞机里

b. 坐在飞机上 [飛行機に乗っている]

例 (44) においては「本棚」に対して用いられる方位詞が異なっている。“书橱”は扉付きの本棚であり、本は内部に存在するものとして、一方“书架”では本は目に見える各段に存在するものとして捉えられている。前者では扉があることにより、閉ざされた内部空間が形成されることになる。(45a) では“里”によって主体がLの内部に存在していることが示されているのに対し、(45b) の“上”を用いた例は、具体物との表面的な接触に着目したものである。そして (46) のようにLが乗り物の場合には、その接触がLの内部における主体の存在として解釈されることになる。従って、方位詞“上”の表す空間概念については次のように区分できる。

(47) “上”  $\left\{ \begin{array}{l} - \text{接触} \\ + \text{接触} \end{array} \right. \begin{array}{l} \text{位置的に上} \\ \left\{ \begin{array}{l} \text{表面 例：椅子、火车 ……} \\ \text{内部 例：飞机、火车 ……} \end{array} \right. \end{array} \begin{array}{l} + \text{上} \\ + \text{上} \end{array}$

接触がない場合には方位詞のもつ性質により、明確な区切りをもたない漠然とした空間を指すことになる。

(48) a. 门外 [扉の外]

b. 房子东边 [家屋の東側]

また、朱德熙 1982:44 に“里、上”は様々な名詞の後に自由に加えることが可能であるのに対し、その反義語である“外、下”は自由に名詞と結合できない旨、記述がみられる。

(49) a. 树林里 [林の中] \*树林外

b. 桌子上 [机の上] \*椅子下

《朱德熙 1982:44》

こうした語彙的な制約に加え、統語面でも“里、上”の方が無標 (unmarked) となっている<sup>6)</sup>。

(50) 他在教室等小王。 [彼は教室で王さんを待っている]

= a. 他在教室里等小王。 [彼は教室の中で王さんを待っている]

≠ b. 他在教室外等小王。 [彼は教室の外で王さんを待っている]

このように、話者は言語化する際にその対象自体の属性に着目している。すなわち実態が有する典型的な区域に基づいてそれを認識し表現している。②の場所詞について、人間との関係において第一義的に表されるのはその内部空間への存在である<sup>7)</sup>。また、例えば平井・成戸 1994:129 が「名詞の表わすモノが述語動詞の表わす動作・行為に対して空間を提供する」場合として挙げている次の例をみると

(51) a. 水是瓶(の中)に入っている。

b. 書類はテーブル (の上) に置いてある。

《平井・成戸 1993 : 174 および 1994 : 129》(体裁は引用者)

ここではそれぞれの有する「内部区域」(interior region) (例 51a)、「外部区域」(exterior region) (例 51b) という属性に関わる機能面が明確となっているため<sup>8)</sup>、方位詞の使用は任意となっていると考えられる。そしてこのことは往々にして表現の上での差となって現れてくる。例えば

(52) a. 書類はテーブルニ置いてある。

b. ? 書類は机ニ置いてある。

c. 書類は机の上ニ置いてある。

《a は平井・成戸 1993 : 174、bc は平井・成戸 1994 : 130》

「テーブル」はその平面が使用に供せられるのに対し、「机」は平面に加えて引き出しなどの存在により、それ自体が使用に供せられるためbが不自然となる。従ってbとcでは「机」は「置く」との関係でみた場合、空間にはなり得るがモノにはなり得ないため、cのようにトコロ化する必要がある旨が、平井・成戸 1994 : 130 に述べられている。つまり機能に着目した場合、aのテーブルは主としてモノを置くところとして、bの机は行為の場所としての認識が強く働いているといえる(荒川 1992 : 84 参照)。さらに

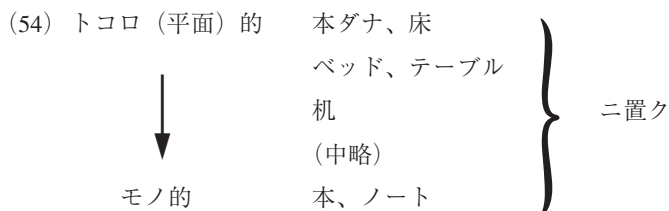
(53) a. 彼は椅子ニ座っている。

b. ? 彼は椅子ニ立っている。

c. 彼は椅子の上ニ立っている。 《bc は平井・成戸 1994 : 130》

という表現の成立の可否についても、椅子の本来有する「座る」という機能が言語化される際に影響する<sup>9)</sup>。

荒川 1992 : 84 は名詞のトコロ性に意味的な段階を設定し、「~ニ置く」との組み合わせで、下の方が不自然となるためモノ的であると述べている。



《荒川 1992 : 84》(体裁は引用者)

また、方位詞には名詞をトコロ化する機能に加えて、「トコロをさらに狭く限定」するという意味的な働きも備わっている。すなわち、例えば“里”の指す「内部空間」にも階層性が存在するため、次のような意味の相違がみられる。

(55) a. 他在游泳池。 [彼はプールにいる]

b. 他在游泳池里。 [彼はプールの中にいる]

c. 他在游泳池(里)游泳。 [彼はプールで泳いでいる]

(55a) は建物としての施設という性格が現れた場合で、主体が「プール施設のどこか」にいることを述べたものである。bは方位詞の付加によってトコロ性が明確となり、存在場所は「水の中」に限定される。そしてcでは方位詞はなくともその行為が明示されていることにより、同様に「水の中」における存在が明確となる。このことは次のような複合的な移動を表す事象にも反映される。

(56) 日： プールの中に滑り降りた

中： a. 滑进游泳池(里)

b. ?滑到游泳池 → 滑到游泳池里

(56a) は“进”がLとの位置関係を明確にしているため、“里”は省略可能であるが、bでは“到”は経路しか表しえないため、方位詞“里”によって位置関係を示す必要がある。そして先にみた所有と存在の観点からみても、“里”の有無によりOの存在位置に違いが生じてくる。

(57) a. 我们学校里有三个图书馆。 【存在】 [私たちの学校の中には図書館が3つある]

b. 我们学校有三个图书馆。 【所有】 [私たちの学校には図書館が3つある]

《高桥 1992 : 55》(体裁は引用者)

(57a) では図書館の位置はキャンパス内に限定されるが、bでは別の場所に存在することもありうる。

モノのトコロ化の問題に関しては、上記のようなモノの機能という属性に着目したものに加えて、さらにモノとトコロの「本来的な相性」とでもいうべきものが関わっている。例えば森山 1988 は次のような例を挙げて、「(前略) ここで問題になることは、「場所名詞」の「場所」が、何にとつての「場所」であるかという問題である」(176頁)と述べている。

(58) a. 笔は デスク/デスクの上 にある。

b. 皿は ??デスク/デスクの上 にある。

《森山 1988 : 175》

こうしたモノに備わったトコロとしての機能には意味のつながりが見出せるが、このことは、場所と行為の関係についても当てはまると考えられる。つまり、場所と行為の間にはある種の関係が内在しており、それがトコロ化の問題ともリンクしているのである。このことを中国語の動作表現における方位詞の問題と関連付けてみると、例えば

(59) a. 他现在在大学工作。 [彼は今大学で働いている]

b. ?他今天在大学监考。

→ 他今天在大学里监考。 [彼は今日大学で試験監督をしている]

《方经民 2002a : 2》

(59a) では主体の勤務先としての大学という、いわば属性が示されているという意味でトコロ化する必要はない。一方、具体的な個別の動作（ここでは「試験監督をする」）に言及した(59b)については“里”を付加する必要がある（第3.1節でみた“有指”化に相当）。しかし同様の行為であっても次の例では方位詞の付加は任意となる。

(60) a. 他今天在教室(里)监考。[彼は今日教室で試験監督をしている]

b. 他今天在自己班(里)监考。[彼は今日自分のクラスで試験監督をしている]

ここでは場所と行為の間に密接なつながりを見出すことができる。つまりその行為はその場所における本来の目的の機能の1つとして解釈可能であるため、“里”が省略できると考えられる。こうした観点でみると、次の例(61)を対比や回答として用いるという前提のない単独のものとしてみた場合、bではやはり“里”があった方がよい。

(61) a. 小王在厨房(里)。[王さんは台所にいる]

b. ??小猫在厨房。→ 小猫在厨房里。[猫は台所にいる]

《杨宁 2001:2》

(61a) では人間である“小王”が“厨房”に存在していることから、例えば“做菜”[料理をつくる]のような行為が容易に連想可能であるため文は成立する。しかし(61b)における動物である猫に関してはそうした必然性が感じられず、台所の本来の機能とは直接結び付かないため、実際の存在を描写するには“里”を加えてトコロ化する必要がある。同様に次の例(62)においても、主体のLへの存在の意味的な動機付けという点でbはaより成立の度合いが劣るために、単独で用いられる場合には通常方位詞が付いた形となる。

(62) a. 菜板在厨房。[まな板が台所にある]

b. ?黑板在厨房。→ 黑板在厨房里。[黑板が台所にある]

このように、Lに方位詞を付加してトコロ化することにより場所としての実質義が具現化され、存在主体との結び付きは任意のものとなる。

#### 4. まとめ

方位詞はモノをトコロ化するという文法的な機能を有する。さらにその使用に際しては対象の形状の特徴のみならず、主体・機能・行為との関連において、その属性を如何に捉えるかという発話主体の認識が関わっていることを以上で述べた。

#### <注釈>

- 1) 本稿では「\*」はその表現が不成立、「?」は不適切、「??」はさらに容認度が劣ることを表すものとする。
- 2) この場合、“飞”が目的語としてとるものは地名に限られており（例：飞北京）、また“上”や

単独で用いられた“出”などと目的語の組み合わせが“去”の場合にみられるような自由なものではない(例:??出教室 → 走出教室) ことなどから、場所目的語の性格は均等のものだとはいえない。荒川 1984 参照。

- 3) 例えば沈家煊1999:37は

hide *under* the bed          躺在床上

look *behind* you          朝你后头看

などの例において、英語が「介詞(前置詞)+名詞」、中国語が「介詞+名詞+方位詞」の形をとっていることを根拠に“~汉语表达方所关系的形成属于“分析式”, 英语(中略)属于“融和式””(37-38頁)と述べている。

- 4) 動目連語における目的語について、孟琮等 1987が場所目的語としているもの(例:咬手指头、砍树根)を三宅 1998は意味的に分類し、場所としてマークされる根拠を「[全体]の中の「部分」として認知されているメカニズムが働いている点にあるのではないか」(63頁)と述べている。
- 5) 郭熙 1986. <“放到桌子上”“放在桌子上”“放桌子上”>, 《中国语文》第1期参照。
- 6) 同様の指摘は高橋 1992:55-56にもみられる。  
如果是处所名词里面发生的事, 方位词才能省略(如:他们在食堂(里)吃饭/引用者注), 如果是处所名词外面发生的事, 一定要加方位词(如:他们站在食堂外边聊天儿/引用者注)。
- 7) 杨宁 2001は方位詞の付かない“\*小王在仓库。”“\*小王在牢房。”などが不成立である原因として、“~ {仓库}、{牢房} 却不能满足人们的基本需要”(4頁)であることを挙げたうえで、場所詞のプロトタイプを“表示人们在其中进行基本活动的场所”(4頁)としている。
- 8) Svorou 1994:15-16は実体が有する典型的な区域に基づいて実体を「内部区域を有する実体」(例:boxes、cans)、「外部区域を有する実体」(例:blackboards、trees)、「それ自体が区域 (being regions) となっている実体」(例:fields、continents)に三分している。
- 9) (53c)のように「の上」を加える操作を、荒川 1992は「[椅子]から平面性をとり出す」(85頁)と表現している。

### <例文引用文献>

老舍『骆驼祥子』人民文学出版社(1989.9)。

### <主要参考文献>

荒川清秀1984.「中国語の場所語・場所表現」, 『Foreign Language Institute(愛知大学外国語研究室報)』No. 8, 1-14頁。

荒川清秀1992.「日本語名詞のトコロ(空間)性-中国語との関連で-」, 『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』, くろしお出版, 71-94頁。

平井勝利・成戸浩嗣1993.「中国語の「在・トコロ+V」と日本語の「非トコロ・ニVする」表現の考察(一)」, 『言語文化論集』第15巻 第1号, 名古屋大学言語文化部, 169-189頁。

平井勝利・成戸浩嗣1994.「中国語の「在・トコロ+V」と日本語の「非トコロ・ニVする」表現の考察(二)」, 『言語文化論集』第15巻 第2号, 名古屋大学言語文化部, 119-132頁。

池上嘉彦2000.『「日本語論」への招待』, 講談社。

三宅登之1998.「ある種の場所賓語の動詞との意味関係について」, 『東京外国語大学論集』第56号,

57-66頁。

森山卓郎1988.『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院。

高橋弥守彦1989.「方位詞の用法について」,『中国語学』236号, 84-94頁。

方经民1997.〈论汉语方位参照系统中的对立平行现象〉,《大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集》, 東方書店, 125-140頁。

方经民2002a.〈“零维地点域/多维方位域”对立和汉语语法分析〉, IACL-11レジュメ(愛知県立大学)。

方经民2002b.〈论汉语空间区域范畴的性质和类型〉,《世界汉语教学》第3期, 37-48頁。

方经民2003.〈现代汉语空间名词性成分的指称性〉, 未刊。

高橋弥守彦1992.〈是用“上”还是用“里”〉,《语言教学与研究》第2期, 47-60頁。

李临定1990.《现代汉语动词》, 中国社会科学出版社。

刘宁生1994.〈汉语怎样表达物体的空间关系〉,《中国语文》第3期, 169-179頁。

孟庆海1986.〈动词+处所宾语〉,《中国语文》第4期, 261-266頁。

孟琮等编1987.《动词用法词典》, 上海辞书出版社。

沈家煊1999.〈英汉方所概念的表达〉,《著名中年语言学家自选集 沈家煊卷》, 安徽教育出版社, 30-57頁(2002), (原载《汉英对比语法论集》第3章「方所」, 赵世开主编, 上海外语教育出版社, 1999年)。

史有为1982.〈关于名词和处所词的转化〉,《汉语学习》第1期, 6-9頁。

杨宁2001.〈汉语处所词为什么可以不帶方位词?〉, 日中言語対照研究会 第4回大会レジュメ(大東文化会館)。

張黎2001.《漢語意合語法學綱要》, 中国書店, 73-94頁。

朱德熙1982.《语法讲义》, 商务印书馆(1997)。

Svorou, Soteria. 1994. *The Grammar of Space*. John Benjamins Publishing Company.